

# 発達障害児者の行動問題から教育・福祉の充実を目指す PBS(15)

## ーPBS 推進者へのリーダー研修ー

企画者	平澤紀子（岐阜大学）
司会者	平澤紀子（岐阜大学）
話題提供者	庭山和貴（大阪教育大学）
	平澤紀子（岐阜大学）
	田熊立（千葉県発達障害者支援センター）
指定討論者	大久保賢一（畿央大学）

KEY WORDS: 行動問題、Positive Behavior Support、PBS 推進者

### 【企画趣旨】

本シンポジウムでは、応用行動分析学の Positive Behavior Support (PBS) の考え方や方法を基に、教育や福祉現場における行動問題の支援に関する課題を検討している。

今回は、学校や福祉施設において PBS の実践を推進するために、誰を推進者として、どのような力量が必要なのかを検討した。その結果、推進者には PBS の知識とともに、現場の諸条件を踏まえて実行計画を作成し、専門家や現場との連携・協働を図る力量が必要ことが明らかにされた。

上記を踏まえて、今回のシンポジウムでは、PBS の推進者へのリーダー研修を検討する。話題提供者には、海外における PBS のリーダー養成の動向やわが国の学校、福祉施設における取り組みを、誰を推進者として、どのような研修（学習）をどのような仕組みで提供すればよいか、また課題は何かについて提言してもらう。指定討論やフロア討論を踏まえて、PBS 推進者の養成について明らかにしたい。なお、各話題提供の事例等については、個人情報情報を厳守し、対象者・関係者から公開の了解を得ている。

### 【話題提供者の趣旨】

#### 1. SWPBS の普及に向けたリーダー養成

庭山和貴（大阪教育大学）

学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）は、学校全体で組織的に PBS を実施することで、児童生徒の望ましい行動を伸ばし、行動問題の減少を図る取り組みである。言い換えると、SWPBS は学校規模で全教職員の指導・支援行動を「PBS 的」なものへと導くアプローチだと言える。教職員の行動変容を導くためには、座学の研修では不十分なのが先行研究によって指摘されており、学校現場での「コーチング」が必要ことが示されている。よって、このコーチングを教職員に対して学校現場で行う「コーチ役」＝「PBS リーダー」の養成が SWPBS を普及させていく上では必要不可欠である。本話題提供では、SWPBS が 27,000 校以上に導入されている米国における「コーチ」の養成について概観した上で、そのコーチが学校内外で果たしている「機能」を行動分析学の観点から整理し、日本で同等の機能を果たす役割を誰が、どのように担うのか、そういった人材をどのように養成していくべきかについて、日本における実践例をもとに論じたい。

#### 2. 機能的アセスメントの活用に向けたリーダー養成

平澤紀子（岐阜大学）

PBS を推進するリーダー研修について、実行や維持の観点から、制度や職務に埋め込むことが重要であると思われる。本報告では、学校教育において、今日求められている個別の教育支援計画を通じた就学支援において中心的な役

割を担う特別支援教育コーディネーターを対象として、機能的アセスメントを活用した支援計画を担任と作成する力量向上を目指した研修を報告する。筆者が機能的アセスメントを講義し、研修者が担任と対象児の支援計画を作成する演習を行った。その結果、研修者は研修を受けていない教師と行動問題の機能に応じた支援を計画でき、その支援計画により対象児の行動変容が得られた。ただし、研修者や学校の条件により違いもみられた。以上から、制度や職務として、機能的アセスメント研修を提供することは学校がエビデンスを活用するために有効である。ただし、研修者等の条件に左右されないコンテンツが課題となる。その解決に向けた支援提案アセスメントを紹介したい。

#### 3. 強度行動障害者支援におけるリーダー養成研修

田熊立（千葉県発達障害者支援センター）

強度行動障害者支援は、長年にわたる福祉領域の課題である。2013 年厚労省より、強度行動障害者への標準的支援を普及するための研修カリキュラムが示された。受講者は年間 1.5 万人にのぼるが、多くの事業所で標準的支援の実践に至っていない。福祉現場では、厚労省の示した座学中心の Off-JT 以外に、人材養成や支援チームを構築するための手法として、コンサルテーション、内外部の SV、On-JT、事例検討等が用いられる。外部との連携によって Off-JT と現場の溝を埋めるには、効果的に On-JT や事例検討を展開できるカウンターパートナーが現場側に必要である。千葉県では、リーダー養成研修において、パートナー育成のための研修要件を検討してきた。受講者の学習は「障害理解と PBS による QOL の向上」という支援コンテンツと「支援の継続と改善のための仮説検証（効果評価）型 PDCA」という支援プロセスに大別できる。パートナーが PBS の推進者として機能するために、この両方が重要であることを話題提供したい。

### 【指定討論の趣旨】

大久保賢一（畿央大学）

リーダー養成研修の在り方について検討するためには、前回シンポジウムでテーマとした「PBS の実践を推進するために、誰を推進者として、どのような力量が必要なのか？」ということとリンクさせて議論を行う必要がある。さらにそれぞれの現場において、研修を効果的・持続的に行うための時間的、専門的なリソースをどのように確保すればよいのかという検討も必要となる。指定討論においては、各話題提供者と研修の実現可能性や必要なリソースについてディスカッションしたいと考えている。

(HIRASAWA Noriko, NIWAYAMA Kazuki, TAKUMA Ritsu, OHKUBO Kenichi)